

Title	20 : 東京歯科大学水道橋病院口腔外科における入院手術症例の臨床的検討
Author(s)	住吉, 美咲; 西山, 明宏; 大野, 啓介; 吉田, 秀児; 高木, 亮; 菅原, 圭亮; 別所, 央城; 渡邊, 章; 山本, 信治; 笠原, 清弘; 高野, 正行; 齊藤, 力; 片倉, 朗; 柴原, 孝彦
Journal	歯科学報, 118(3): 247-247
URL	http://hdl.handle.net/10130/4604
Right	
Description	

No.19: がん化学療法に併発する口内炎に対する支持療法の探索

小澤夏生, 林 宰央, 本多佑名, 関川翔一, 恩田健志, 柴原孝彦 (東歯大・口腔顎顔面外科)

目的: 口内炎は, がん治療における化学療法に際して高頻度に発現する有害事象である。発症は患者のQOLを著しく低下させ, 化学療法の中断を余儀なくされることも多い。確立された有効な治療法は無く, 担当する歯科医師により症状に応じて対症療法が行われているのが現状である。本研究では化学療法により発現した口内炎に対する有効な支持療法を確立するためにラット抗がん剤誘発口内炎モデルを用いて, 化学療法後に発現した口内炎に対して臨床的に内服での使用報告のある薬剤を応用し, その効果を実験的に検証した。

方法: 10週齢SDラットを使用した。抗がん剤5-FUをラットに5日間連続投与し(60mg/kg), 6日目に酢酸溶液を用いて舌背部粘膜を刺激し口内炎を作成した。口腔内を①水, ②アズレンスルホン酸ナトリウム水和物, ③トラネキサム酸, ④レバミピド, ⑤スクラルファート水和物, ⑥ポラプレジンゲ, ⑦半夏瀉心湯にて各群を連日洗浄し, 3日目, 5日目, 10日目にNCI-CTCAEを参考にして作製した舌炎症度評価基準を用いて評価した。また, 各薬剤の抗菌作用を評価するため, Dielectrophoretic

Impedance Measurement法(細菌カウンタ; Panasonic)を用いて口腔内総細菌数を測定した。なお, 本実験は東京歯科大学動物実験委員会の承認を得た上で行った(承認番号: 292406)。

結果: 全群において経時的にGradeは低下し, 悪化するものは認められなかった。各種応用薬剤は, 外用として用いても効果が認められた。特に, 半夏瀉心湯群は経時的に最も低いGradeを示した。各群ともに口内炎の改善に先行し, 口腔内総細菌数の減少が認められた。中でも半夏瀉心湯群の総細菌数が最少であった。

考察: 化学療法に伴う口内炎は, 口腔粘膜にフリーラジカルが生じ粘膜の破壊や炎症によって発生するもの(Primary)と, 白血球低下により生体防御機構が低下し感染が生じて発生するもの(Secondary)とが考えられている。半夏瀉心湯は抗菌作用を有し, 易感染性に起因した細菌感染のSecondary口内炎に対する有効性が示唆された。ラット抗がん剤誘発口内炎モデルにおいて, 半夏瀉心湯は抗炎症作用, 抗菌作用を最も発揮し, 口内炎に対する有効な支持療法の確立に貢献できる可能性が示唆された。

No.20: 東京歯科大学水道橋病院口腔外科における入院手術症例の臨床的検討

住吉美咲¹⁾, 西山明宏²⁾, 大野啓介¹⁾, 吉田秀児¹⁾, 高木 亮²⁾, 菅原圭亮²⁾, 別所央城²⁾, 渡邊 章¹⁾, 山本信治¹⁾, 笠原清弘²⁾, 高野正行¹⁾, 齊藤 力¹⁾, 片倉 朗²⁾, 柴原孝彦¹⁾ (東歯大・口腔顎顔面外科)¹⁾ (東歯大・口腔病態外科)²⁾

目的: 水道橋病院口腔外科では顎変形症, 口腔癌, 唇顎口蓋裂を軸として手術を行っているが, 最近では過去と比べると多彩な症例が増加してきている。それらの症例に対する手術を行う上で過去と同様のシステムでの対応が困難となってきた。今回われわれは, 手術件数の増加に対する手術室稼働の効率化を図るため, 過去9年間の入院手術症例の臨床検討を行った。

方法: 対象は平成20年4月1日から平成29年3月31日までの9年間に東京歯科大学水道橋病院口腔外科で入院管理, 全身麻酔下に手術を施行した患者とした。調査項目はカルテならびに患者情報をもとに手術件数・手術内容・男女比・年齢・手術時間・出血量・月平均手術件数について集計した。

結果: 9年間の手術症例数は4,053件で, 年間平均は450件であった。年次推移では, 近年症例数は毎年増加傾向を示しており, 平成27年度は557件と過去9年間で最多であった。性別は男性1,788件(44.1%), 女性2,265件(55.9%)で女性が多く, 手術時年齢は20歳代が1,288件(31.8%)と最も多かった。顎矯正関連手術(重複あり)が1,377件

(34%)で最も多く, 次いで嚢胞摘出術800件(19.7%), プレート除去術765件(18.9%)であった。月平均の手術件数は平成28年度が51.2件と最も多く, 近年は年々増加傾向にある。

考察: 入院手術件数は, 平成27年度は前年度に比較して18.8%の増加がみられ, その後はほぼ同様の件数であった。この要因として平成27年度より手術室の入室時間を30分繰り上げ, 1つの手術室で1日に5時間以内の手術が可能になったことがある。また平成27年度より口腔外科が2講座制となり執刀医が増加したことも要因と考えられる。一方で平成28年度は手術件数の減少がみられたが, これは約3か月の病棟, 手術室の改装工事が影響している。手術室を円滑に運用することを目的として, 改装を機に平成29年度より手術室では曜日による手術件数の制限をなくし, 月曜日, 金曜日の手術枠を増やした。また同年7月より低侵襲の手術は積極的に歯科麻酔科における外来全身麻酔を使用している。今後も入院手術症例の臨床統計的検討を継続することで病棟, 手術室の効果的運用を図るとともに, 安全で良質な口腔外科診療の提供に努めていきたい。